

279 妊娠に合併した大腸菌 0-157感染症例の治療経験

八尾徳洲会病院

柿崎裕彦、宮里博保、榊原繁樹

0-157 感染症は、症状がある場合、約6-7%では、下痢、腹痛などの初発症状の発現の後、数日から2週間で、溶血性尿毒症症候群(HUS) または脳症などの重症合併症を発症する。

我々は妊婦が 0-157感染症を合併した症例を経験したので報告する。

症例は23才で平成 8年 7月 6日(妊娠22週+2日)、心窩部痛、軟状便を主訴とし、当院内科を受診、胃腸炎と診断され、粘膜保護剤、制酸剤、乳酸菌製剤を処方され一時帰宅したが、吐気、腹痛のため再来、H2受容体拮抗薬の点滴静注を受けた後、帰宅した。7月8日、腹痛増強のため、また、妊婦健診も兼ねて当院産婦人科受診、苦悶状顔貌、下腹部痛、軽度の子宮収縮がみられた為、直ちに入院、連日の便培養、CBC、CRP検査、及び点滴静注による抗生剤治療を開始した。抗生剤は、セフトラゾールナトリウム 2grを12時間毎に静注、子宮収縮に対しては、テルブタリンを投与した。臨床症状は、発症より第7病日に改善した。検査データは、CRP は全経過、陰性であった。WBC は4700から5000/mm³であり、血液所見からは炎症を疑うことはできなかった。便培養にて7月16日、0-157 が同定され、7月28日(第22病日)にベロ毒素-1、ベロ毒素-2を放出する病原性大腸菌 0-157と確定できたが、感染源は同定できなかった。第11病日、完治、退院した。7月31日、(25週 6日)妊婦健診に来院したが、全く正常の経過であった。

以上の如く、本症例は重症合併症なく治癒したが、これは 0-157感染症と確定する前に、理学的所見から 0-157感染症を疑い、早期に抗生剤治療が奏効した症例である。

280 妊娠中のサイトメガロウイルス抗体陽転例の血清学的検討

石川県立中央病院、福井医大*

干場 勉、佐藤尚明、西本秀明、朝本明弘、矢吹朗彦、鈴木由里子*

〔目的〕 サイトメガロウイルス (CMV) の胎内感染は妊娠中の初感染時の方が再活性化時より重篤になる。初感染では抗体が陽転するが、従来からのCF抗体は低感度ともされる。そこで、今回CF抗体陽転例を調査すると共に、ELISAでCMV-IgG, IgM抗体を測定し検討した。

〔方法〕 1987年から1995年の間に妊娠前期後期共にCF抗体価を測定し得た3906例の妊婦を調査した。CF抗体価が前期陰性で後期8倍以上をCF抗体陽転とし、前血清を含めた144血清をELISAで測定した。CF抗体測定は50%溶血法に基づくマイクロタイター法を用いた。ELISAはエンザイグノストB サイトメガロIgGおよびIgMを用い、抗体再上昇は吸光度値及び上昇率が5SDを超えるものとした。

〔成績〕 前期CF抗体陰性 871例中CF抗体陽転は49例(5.6%)にみられ、そのうち前後期血清が測定し得た46例中ではIgG抗体陽転は11例だった。陽転後CF抗体価が8, 16, 32, 64倍の症例は各々27, 13, 5, 1例であり、そのうちIgG抗体陽転は各々2, 5, 3, 1例にみられ、陽転後CF抗体価が高いほどIgG抗体陽転率は高かった。また46例中9例はIgG抗体再上昇を示した。IgM抗体はIgG抗体陽転11例中3例が陽性となったが、IgG抗体再上昇例ではすべて陰性であった。

〔結論〕 IgG抗体陽転を初感染とすると、随時測定したCF抗体陽転例の約4分の1のみがCMV初感染となった。今回の検討からは最近の妊娠中のCMV初感染率は全妊婦の0.30%、CF抗体陰性例では1.38%と推定された。